

釣りに釣られて

高原英夫



## 第四回 「八丈島」

釣り師といわず、何につけ誰でもと思うのだが、どこか遠くへ行けば大きいものが釣れる。つまりロマンがある。そんな想いが必ずあると思う。

青森でいえば岸壁釣りしているうちに、下北の尻屋だったらとか、竜飛だったらとか、遠い所に比例して釣りの夢だけは確かに広まることだけは絶対なことだ。

もつとも、釣りを生業としているわけでもなく、せいぜい土・日の休日を釣りに当てている身分の会社員にとつては、なんとか島の大物釣りなどという話は、テレビの釣り番組の話であつたり、前にも紹介した開高健氏の「オーパ！」のように、その夢を小説家の体験にあずけて、その気分浸ることで満足することでしか生きていくしかないのだ。

ところで、この私のことだが、実は八丈島に二度も釣りに出かけていたのである。仕事仲間で北陸地方の新聞社の石田さんが、八丈島の観光協会の役員をやっている人と知り合いだというのである。当時私は四十代、当の本人は間もなく定年、そん

な歳だった。東京は、有楽町の西銀座。あの「宝くじ」といえば必ずテレビに映るビルの二階の八丈島の料理を出す店だった。石田さんと何人かで店に出入りしているうちに、あの八丈島へ釣りに行こうということになった。シマアジだの、イシダイだのと釣りのパラダイスに出かけるという興奮が私を包んだ。四人で行くことになった。一人は秋田の人、そして私の上司だったUさん。釣りは私と石田さんだけで、あとの二人は観光という訳だ。

東京の竹芝棧橋から、確かポインセチアだったか南国の花の名前のついた船に乗り込んだ。出航は夜の十時頃である。それでも本格的な釣り師の竿やらクーラーやらの人達が何人もいて、私などは、そのいでたちに怖気づくような感じさえ抱いた。東京湾は混雑のため、船はゆつくりと進む。そして、まず朝には三宅島に着き、乗客を降ろしていく。火山の溶岩がそのままむき出しの三宅島を離れると、御蔵島、神津島が見えては消えていく。そして出航してからおよそ十時間、船は八丈島に着いた。

四人は、観光協会のあの人が手配してくれた民宿で荷を解いた。宿は、カビくさ

い部屋で、誰からともなく「大丈夫かよ」と声が漏れた。ただ今は忘れてしまつたが、それだけに宿代も安かつたのだ。二泊したと思うのだが宿代の記憶がまつたかない。

当日は午前中に着き、すぐ釣りという訳にはいかなかった。でもさすがに観光協会の役員職にある人だけあつて、自分の会社の従業員を案内役につけてくれた。島村さんという人で、三十代前半だろうか、日に焼け、屈強な体をして宿に来てくれていた。早速、明日の準備ということで、島の釣具店に行った。もちろん、私と石田さんのみである。竿だつて何だつてほとんど見当がつかない。ほとんどの用具は、島村さんが用意してくれていて、あとはマキエのオキアミだけなのだが、島村さんは、まず二人分としてオキアミの凍つたヤツをマキエ用一箱、エサ用一箱と二人二箱を買うようにと言つた。ハンパじゃない。そして、針につけたオキアミをキャップの中に入れ、つまり投げ出した時にオキアミが飛び出さないようにし、なおかつ、海面に落ちるとその容器から海中に落ちていく仕掛けを用意してくれていた。

宿ではワゴン車を好きに使つてくれと一台用意してくれた。釣りの支度も終え宿

に戻り、その後観光となった。四人の中では一番若かった私は、運転手を務め、その日のうちに八丈島を一周した。島村さんも加わり、あの小島がインダイ釣りのメッカだとか、この崖の下がメジナのポイントだとか、車の中で観光を兼ねながら、皆に八丈島を思いっきり語ってくれた。

さて翌日、朝早く起き出し、島村さんも宿に来てくれ、灯台のある広場に車を置き、その下の釣り場まで降りることとなった。ところがである。石田さんは、いまでいうメタボの六十歳にんなんとする人である、荷物を持たせるわけにはいかない。前日、釣具店で買ったオキアミを都合、一人二箱ずつ、つまり、私と島村さんとで四箱分を持って険しい崖を降りなければならなかった。車の後ろの扉を開け、二箱分をかついではみたが、とても崖を下れるという代物ではなかった。釣り道具も含め、結局、釣り場まで落ちればイチコロの岩場を二回往き来した。

そこは六畳はあろうかという、海からの高さは十メートルはある突き出した岩場だった。海苔でとても滑りやすく、ヘッピリ腰の釣りとなり先端には出れなかった。

何をねらうのか「シマアジ」だ。磯竿の何号だったろう。両軸受けのリールで、

しかも前に書いたようにキャップをつけてウキ下がとんでもなく長い。それを投げ込むのである。とてもすぐできる技ではなかった。だが島村師匠はやすやすと何十メートルも飛ばすのである。師匠は、導入の部の懇切丁寧な指導はしてくれたものの、しばらくして会社へ出勤するといつて、帰ってしまった。

なんとか投げ込むと、スーッと浮きが沈み、見たこともない魚が釣れてきた。サヨリのデカイのだと思つたが、石田さんは、

「ダツだよ、ダツ。外道、外道」といつてまったく取り合ってくれなかった。するとまたかかった。

「メジナだ」

「それはイスズミだあよお、外道」

ばたばたと釣れ、やつとの思いで運んだクーラーはもう一杯になつてしまった。ただ肝心要のシマアジはまだきていない。

ポーンと投げこんだ。何しろスピニングリールのようにはいかない。両軸受けのリールで投げ込むのだ。潮は足元から沖へと出ていたので、それほど無理をする必

要がない。でも何とか少しでも遠くの方へ投げ込みたい。バックラッシュをおこしてしまった。糸を手で送り出して、またしつかりと巻き直している最中だった。

「あつ、きてる、きてる」と石田さんが叫んだ。

手元のリールに目をやっている私は気づかなかった。流れて沖に行っているはずのウキが足元まできて、右へ回りはじめていた。やつとリールも正常に戻った。グイと合わせた。合わせたものの、そのまま動かなくなってしまった。岩場にもぐり込んでしまったのである。そのうち出てくるかと放っておくと、やはり魚はかかったままで竿先をピンピンと引いている。待ちきれず、切れるのを覚悟であげることにした。

「ブツッン」

切れてしまった。切れたのはテグスではなかった、クッションにしたゴムがぶつかりと切れていたのだ。足が震え、どうにもならなかった。あとで石田さんから聞いたのだが、私が海に落ちるか、私の後で腰をつかんだと言うのだが、まったく覚えがない。

結局二人には、シマアジは釣れず、納竿となった。ところがである。その岩場から登って帰ろうにも、私一人では重過ぎてとてもじゃないが登れないのである。背負える重さまで二人で止むを得ず、クラーから魚を取り出し、海へ戻さざるを得なかった。もつとも、あとで考えると外道中の外道で、夜の宴会にと持ち帰っていたれば宿の主人にすれば、こんな魚をと思うものばかりだったのだが、その時は断腸の思いがしたのだった。

島村さんは、季節が悪いのだという。二月にすれば、もう大変だという。しかし、その頃は、転勤シーズンで送別会の連チャンで、八丈島へはちよつと無理なのだ。彼は、当時でも相当高そうな竿もリールもメジナを売って手に入れたのだといっていた。

次の年も、もう一人釣り人が加わり、また八丈島へ行った。似たようなものだった。ただ今調べてみるとニザダイだと思っただが、通称でサンノジといって側面に丸い黒紋が三つある魚がかかった。強烈な引きで目の前の海を三周もしながらグイグイと引き続けた。ただ、これも外道。さばく時に、ちよつとでも間違うとやたら

と臭く、食べられたものでないというのだ。

別れの日、観光協会の重鎮が経営しているクサヤの干物の工場を見せてもらった。クサヤの文字通りの臭きである。

一箱買ったので、しばらくは食べた。ただそのニオイといたら、まあいうよりは実際に食べてもらうしかない。でも、私は大好きになった。

今でも東京へ出かけると、ムロアジ、トビウオと二種あるのだが、交互にひとつ買ってくる。しかし、家内も、子供たちも一向に箸をつけない。

クサヤを食べるたびに、あの八丈島がアシタバの天ぷらもいっしょくたになって蘇るのである。

平成23年1月